

# Newsletter

March 2005

http://www.aack.or.jp

目次

AAACK人物抄 伊藤愿(イトウスナオ)さん (一九〇八〜一九五六)	平井 一正	1
雲南懇話会 雲南懇話会言始め	松浦祥次郎	6
雲南懇話会の概要	前田 栄三	6
雲南・チベット地域の学術調査 安仁屋政武	安仁屋政武	8
大日岳の「雪庇」調査計画発表される		9
五月連休にヒュッテからワンデイで楽しめる山スキーコース(その二) 高尾 文雄	高尾 文雄	11
図書紹介『山の世界』 酒井 敏明	酒井 敏明	13
会員動向		14
編集後記		15

## AAACK人物抄

### 伊藤愿(イトウスナオ)さん

(一九〇八〜一九五六)

平井 一正

一九七三年、AAACKがヤルンカンに遠征したとき、伊藤愿さんの遺影を西堀隊長が房子夫人にたのんでもらってきていた。隊長はしんみりとして言った。「これをヤルンカンの頂上に埋めてきてほしい」。五月一日松田と上田は小雪まじりの頂上にたつた。松田が雪にさしこんだ写真のセルロイドケースを、上田はピッケルのシャフトでコンコンとたたいて埋め込んだ。このエピソードは、いかに伊藤さんのヒマラヤへの大きい思いが、時代をこえて我々に受け継がれているかを物語る。(伊藤愿、「ヒマラヤに挑戦して」、九二年に中公文庫で再発行、上田豊が解説している)

それでは伊藤愿さんはどういう人であったか、パウエル・パウアーの「ヒマラヤに挑戦して」の翻訳者であり、この本に書かれていた遠征費用から、ヒマラヤ行が具体的に動き出したこと、ポーターメソッドを極地法と訳し、富士山で実践したこと、一九三六年に、AAACKのK2登山の許可交渉のため、インドで交渉を

行ったこと(今西・ヒマラヤへの道、中央公論社)などという断片的なことを除いて、ほとんど知らないと言ってもいいだろう。AAACKの歴史にも関係する重要な人物であり、その登山活動からも、知的活動からも、また国際人としても素晴らしい登山家であったことが想像できるが、我々の先輩としてもっとよく知る必要がある。そういう動機から、資料を調査し、房子夫人にもお目にかかつてお聞きした結果をまとめてここに記す。(以下敬称略)

#### 一、略歴

伊藤は一九〇八年兵庫県香住町の不在地主の長男として生まれた。弟と妹がいたが、妹は小さいときに亡くなっている。弟は三高を出て医者になり、晩年は薬屋をしていたという。同志社中学、旧制甲南高等学校を経て、一九三二年(昭和七年)京都大学法学部を卒業、大阪朝日新聞社に入ったが、社会部の警察廻りに嫌気をさして退社。昭和八年、高文(高等試験行政科試験)にパス。松方さんや浦松さんが関係していた大平洋問題調査会の研究員として中国へ。北京駐在員として中国経済研究に従事。三六年七月から三七年四月までヒマラヤ登山交渉のためインドへ。帰国後再度中国へ。北支の最高



スイスアルプスにて（1951年）

経済顧問だった平生夙三郎（甲南高校創始者）の秘書、興亜院事務官などを経て、終戦のときは青島の領事をしていた。インドに行った期間を除いて、終戦までの生活はほとんど中国であった。帰国して、内閣、経済安定局、外務省、建設省、大蔵省を歴任。一九五一年土木事業の行政制度および法規等の調査研究のため、欧米に三ヶ月の出張を命じられ、余暇にスイスアルプスで登山、ミュンヘンでパウアーと歓談。類い希なる人材であったが一九五六年一月ガンのため没。享年四八歳の惜しまれる死であった。（文献一）

## 二、甲南高校での登山

旧制甲南高校はいまの甲南大学であるが、伊藤は甲南に来てから登山をはじめ、やがて登山界の第一線におどりだす。高校一年の夏（一九二六年、大正一五年）、はじめて燕、槍が岳を縦走、同年冬、スキーをはじめ。芦屋ロックガーデンで岩登りの腕をみがいた伊藤は、翌年夏、単独で滝谷を登り、続いて小槍の単独登山に成功する。滝谷は二年前に早稲田隊による初登山以来の登山であり、小槍は四年前に慶応が登ったところである。そこを若い高校二年生が単独で登ったということ、当時の岳界に衝撃を与えた。このときの彼の徳本峠からたどったトレースを後述する山歴の表に示したが、まさに驚異的な山歩きである。

伊藤の山歴は後に示すが、その中でも特筆すべきは、一九二八年（昭和三年）五月の常念から立山への縦走である。いくら五月とはいえ、装備、食料など今日とは比べものにならないほど重く、雪中露営の知識も乏しい時代に、積雪期に尾根筋を長期縦走するという形式は、着想といい、実行力といい、当時としては画期的であった。

興味あるのは伊藤は大島亮吉の遭難に遭遇していることである。同年一九二八年三月二三日に伊藤は人夫今田重太郎と槍に登った。その帰途二五日に北尾根を登っていた慶応の大島亮吉が遭難し、それを知った彼は遺体捜索の応援に行っている。余談であるが、今西は大島と面識はないが、大島を登山界の鬼才として最大の尊敬を抱いていた。この両雄が

手を組んで仕事をするようなことがあれば、日本の登山史は変わっていただろう。それだけに大島の死は大きい衝撃を与えた。（田口二郎、東西登山史考、岩波、九五五年）

伊藤は学究の登山家でもあった。山岳象と雪中露営の問題にとりこんでいて、その成果は「アルペンクリマについての一断片」（甲南高校山岳部報第二号）、「雪中露営の諸問題」（関西学連創刊号）などにみることが出来る。

伊藤は現在の甲南大学山岳部の先輩でもあり、いま歌われている山岳部部歌も伊藤の作詞である。旧制甲南高校を卒業してAACK会員になっている人は、伊藤のほかには西村格也、喜多豊治などがある。

## 三、京都大学での活躍

常に創造的でパイオニアワークを目指していた伊藤が、大学を京大にしたのは当然の帰結であった。よき土壌をえて、伊藤は思う存分力を発揮する。彼が大学三年生のとき、一九三一年一月、パウアー・パウアーのカンチエンジンガ登山の報告書の和訳「ヒマラヤに挑戦して」を出版する。これはAACKのヒマラヤ熱に火をつける結果になる。（出版社の黒百合社は、日本山岳会の会員中原繁之助さんが営利を度外視して経営に当たっていた。島田翼 山・人・本、茗溪堂、七六年）。さらに同年暮れから正月にかけて、西堀をリーダーに富士山に極地法を展開し、頂上に三晩過す。このときの登山の方法は、我が国ではじめての試みであり、これを伊藤がアサヒスポーツ

で発表したとき、はじめて極地法という名前を使った（アサヒスポーツ、昭和七年二月）。隊員と荷物の輸送はヒマラヤでも十分通用するものであり、時代を先取りするものであった。今西は言う。「新しい形式が極地法でなくてはならぬことは自分たちにも良くわかっていて、しかし如何に実現するか、これについての具体案を示して実行に移したのは、誰であろう。自分たちが愿から教えられたところはまことに多い」。伊藤に対する最上級の賞賛である。

上記二つのできごとの他に、一九三一年六月にはAACKが結成された年でもある。伊藤はこの結成に事務局長的な働きをした。これらの活動に伊藤はすべてに関わっており、彼がAACKの創設からその後の活動に果たした役割は非常に大きい。

すべてはヒマラヤにそのエネルギーのベクトルが向いていた。そしてそれは一九三二年のカブルー計画として発展する。しかし満州事変のためにこの計画は挫折する。

房子奥様から聞いた秘話を紹介する。あるとき平吉功が転落し、行方不明になったことがある。すんでのところ捜索隊がひきあげるところまでいったが、伊藤が最後に逆さまになっている平吉を発見し、危ないところを一命を救った。その場所がはっきりしないが、伊藤が平吉とザイルを組んだ登攀で有名なのは一九三一年一〇月の鹿島槍北壁初登攀である。しかしこのときの記録（関西学生山岳連盟報告、第三号、一九三一年）を読んで、それらしい記述はないので、多分別の場所と

思うが、興味ある話である。

#### 四、卒業後

伊藤は昭和七年（一九三二年）京大を卒業後、ずっと中国において、白頭山などの遠征には参加していない。一方今西らはK2計画をすすめ、一九三六年北京の伊藤を呼び戻し、K2の許可を取りにインドに派遣する（文献二、三）。このとき加藤泰安も同行の予定であったが、費用が足らず伊藤ひとりの派遣となる。費用は田中喜左衛門や奥貞雄らのカンパによった（文献四）。現地では岸本商店が協力した。伊藤がヒマラヤンクラブのセクレタリーに会うとき、入室のサイン帳に「Gen Hiro」と書いたことから、「ゼネラル伊藤か」と言っており、すっかりゼネラルにされてしまい、歓迎されたという逸話がある。しかし日中戦争勃発のため、伊藤の努力も実らなかった。伊藤のインド派遣に関する資料は乏しく、奥様がきいても多くを語ってくれなかったという。因みにこのときK2のサミッターの候補に谷博の名があがっていたという（今西武奈太郎談）。当時のAACKの隊員候補で岩登りで有名であったのは谷と伊藤であった。

終戦のとき、伊藤は中国の青島にいた。敗戦の混乱の中で、彼はひとり奮闘して、青島にいた日本人に、海軍から調達した食料を配給した。知られざる秘話である。しかし彼は麻袋を盗んだというあらぬ濡れ衣で密告され、中国官憲に逮捕され、一三〇日ほど監獄に入れられた。そして昭和二十一年、最後の便で帰国を果たした。帰りの船で、密告した意

兵と会ったが、疲労していたために追求する元気もなかった。奥様はさきに昭和二〇年一月に帰国している。

#### 五、戦後の活躍

帰国後、彼は中央官庁でエリートのをすすむ。一九五一年に欧米に視察を命じられ、その間、スイスアルプスで遊んだ期間を楽しいものであったに違いない。一九五一年の夏、訪欧中の松方三郎、島田巽（朝日新聞ロンドン特派員）と伊藤はグリーンデルヴァルトで落ち合い、そこで愉快な三日を過ごした（文献五、六）。平和条約もまだ締結されていない時代、当時のアルプスは日本人にとって夢のよ



ミュンヘンにてパウル・パウアーと（1951年、文献6から）

うな世界であった。松方にとつては二五年ぶり、あとの二人にとつてははじめてのアルプスであった。彼らと別れてから、伊藤はガイドと共にウェッターホルンに登った。実に二〇年ぶりの山登りであった。

それに自信をつけた伊藤はマッターホルンに登ることになる(文献七)。予約していたガイドが来ないので、単独で、あそこまで、あそこまでというつもりで登っていったら、頂上についてしまった。もちろんガイドブックでルートを諳んじていたこともあるが、若いときに岩登りで鍛えた力が十分に発揮されたことと思う。

ミュンヘン滞在中にパウエル・パウアーと面会し、歓談したことも快挙である。当時パウアーは六〇歳をこえた初老であったが、日独の登山界の話や次のヒマラヤ遠征など話はずんだ。ババリア隊はカンチとナンガの両方に手をつけているが、どっちかを譲ってもらえないかと切り出した。この次にドイツに行くのはカンチになるだろう、と言われ、それなら日本に帰って山のグループからヒマラヤのどれがいいか意見を求められたら、ナンガをあげていいかと念を押した・・・など報告されている。伊藤がそのときなおヒマラヤに情熱を持っていたことが伺える(文献八)。

伊藤はその岩登りの記録から見ても、ACKでは出色の登山家であり、それだけに、もし伊藤が病に倒れなかつたら、必ずや戦後のACKKのヒマラヤ遠征に参加され、我々後輩に大きな刺激を与えてくれたと思う。その夭折が惜しまれてならない。

## 六、山歴

伊藤は学生時代から登山界の第一線で活躍している。簡単にその主な山行きを書くところのようである。(文献一)

- |         |   |
|---------|---|
| 一九二六年四月 | 甲南高校入学、山岳部に入部   |
| 八月      | 燕 槍縦走(香月らと)   |
| 一九二七年七月 | 滝谷、小槍登攀(単独)、<br>徳本峠 上高地 中尾峠<br>蒲田 錫杖 蒲田 槍平<br>槍 南沢 槍平 滝谷 穂<br>高小屋 白出沢 槍平 槍<br>肩の小屋 小槍 溜沢岩小<br>屋 前穂 上高地<br>上高地 一ノ俣小屋 槍ヶ<br>岳往復 横尾 北穂、途中<br>大島亮吉の遭難の報に接<br>し、遺体捜索 上高地(人<br>夫今田重太郎と) |
| 五月      | 常念 槍 槍平 三俣蓮華<br>薬師 立山、ツエルトに<br>よる。(辻谷、今田ら五人<br>と)   |
| 一九二九年三月 | 上高地 善六沢 西穂高<br>(単独)、上高地生活、槍、<br>前穂、西穂(西村、香月ら)<br>京大入学   |
| 四月      | 京大入学  |
| 五月      | 早月尾根と八つ峰 (高橋<br>健治らと)   |
| 一九三〇年七月 | ジャンタルム飛驒尾根初登<br>攀(田口一郎と)  |

## 七月 北鎌尾根(喜多と)

一九三一年三月 八方尾根 五竜 鹿島槍初  
縦走(工業、長谷川清三郎  
と)

- |            |                                    |
|------------|------------------------------------|
| 一〇月        | 鹿島槍北壁初登攀(藤田、<br>平吉と)               |
| 二月         | 「ヒマラヤに挑戦して」出<br>版                  |
| 二月         | 富士山を極地法で登る(西<br>堀、今西らと)            |
| 一九三二年三月    | 京大法学部卒業                            |
| 一九三六年五月    | K2許可取得のためイン<br>ド、カラコルム入りの内諾<br>をとる |
| 一九四六年三月    | 中国から帰国                             |
| 一九五一年七月、八月 | ヴェッターホルン、マ<br>ッターホルン(単独)、<br>病没    |
| 一九五六年二月二七日 | 病没                                 |

## 七、結婚

日高信六郎(元日本山岳会会長)が出張して北京飯店に泊まっていたとき、伊藤が訪ねてきた。「いま結婚を勧められ、自分もその気になっているが、なにぶん先年ヒマラヤ登山を思い立ったとき、成功するまでは結婚しないと仲間同志約束した手前、どうも踏み切れない」と浮かぬ顔である。「そんなことを気にすることがあるものか、戦争などという不可抗力で実現できなかったものが、何で結婚の妨げになるうか、それほど気になるなら、しらみ潰しにその仲間当たってみたまえ、良縁を心から祝福はしても文句を言う奴なん



伊藤房子夫人（04年12月20日）

か一人もいないよ」というと、そうでしょうかとまだ気がかりな様子、何とも言えない山男だと胸を打たれた。（文献九）

こういう経緯があつて伊藤は昭和一七年に房子夫人と結婚した。夫人は松方コレクシヨンの松方幸次郎の孫であり、媒酌は松方三郎である。戦争中のことでもあり、明治神宮で簡単な式をすませただけであつた。女三人、男一人の子供に恵まれ、現在長男は日航に勤務されている。

愛妻家であつた。欧米出張中六ヶ月の間、奥様に九九通のたよりをよせたそうだ（文献一〇）。そのコピーは今も夫人の手元にある。

房子奥様は現在八六歳、青梅の慶友病院におられる。若いときはきつと可愛い、美人であられたと思わせる。今もしつかりして記憶

力も抜群であり、曾孫にも恵まれた幸せな老後を送つておられる。

八、その他

日本山岳会名譽会員織内信彦さんによる伊藤の思い出を紹介する（文献一一、文体一部変更）。

伊藤愿さんが、一人で小槍を登つた記録と、穂高の滝谷を単独で登り、北穂高へ出て南沢を飛騨側へ下りた、そしてまた白出谷を上つて穂高を縦走したという紀行文を読んで、非常に感銘を受けた。「こういう山登りをしてみたい」と思っていたら、一、二年後涸沢の岩小屋に私が滞在していたときに、後から四人ばかりやってきて「まだ入れますか」と言う。「入れますよ」「じゃお邪魔します」と言つて入つてきた。岩小屋といつても小さく、中では立つて歩けない。座つて頭がつかえる位で、横になるだけ。話しているうちにその一人が伊藤愿さんとわかつた。そのときは京都大学に行つておられた。

「私も小槍を登つてきました。伊藤さんが打たれた正面のチムニーに入る手前のハーケンを利用して登つてきました。あれがあつたので、とても助かりました」というと、「あれはもう抜いてきてもらったほうがよかつたかも知れない」と言われたことを覚えている。

それから天気が悪くなつて一週間ばかり風雨が続いたので穂高小屋へエスケープしたが、私は劔へ行く予定があつたため、二日ほどいて下山した。伊藤さんはそのまま残つて、結局、そのときに田口一郎氏と二人でジャン

ダルトムの飛騨尾根の初登攀をやっている。（後略）やがて戦争が終わつて、お茶の水のクラブルームの屋根裏部屋で「土曜会」があつたとき、伊藤さんがひよっこり表れたことがあつた。（中略）そのとき「伊藤さんとは、昭和五年に涸沢の岩小屋でしばらく一緒になりました」というと「覚えていますよ」を言われて嬉しかつた。（後略）

以上稿を起こすに当たつて、甲南大学山岳会越田和男様には数々ご教示賜り、また文献などでたいへんお世話になつた。また同平井吉夫様には房子様訪問に際してお世話になつた。また梅棹忠夫様にはいろいろと教えていただいた。記して感謝の意を表す。

#### 文献

- 一、越田和男：伊藤愿氏山の履歴書、山嶽寮（甲南山岳会）No.59,2004
- 二、伊藤愿：滞印日記抄、甲南高校山岳部内雑誌Vol.VIII-8、1937
- 三、伊藤愿：印度から、日本山岳会会報六〇号、1936年
- 四、今西錦司編：ヒマラヤへの道、中央公論社
- 五、越田和男：一枚の写真から 伊藤愿さんのアルプス行 山嶽寮、No.48、1993
- 六、伊藤愿：アルプス一九五一年、岳人、No.62、1963
- 七、伊藤愿：マッターホルン単独行、日本山岳会会報161、1952
- 八、伊藤愿：パウアーとの会見記、岳人、

九、日高信六郎：伊藤願君を悼む 日本山岳

会会報190号、1957年1月

一〇、田口二郎：伊藤願さんの思い出、山岳

五一年、1958年pp106-116

一一、織内信彦：山と人と本、日本山岳会  
報、2002年2月

## 雲南懇話会

### 雲南懇話会言始め

松浦祥次郎

毎年正月、関東一円に住むAACK会員、笹ヶ峰会会員が東京で新年会を開き、飲みかつ語ります。昨二〇〇四年の新年会で、私が皆さんに一つのご提案をしたことがきっかけとなって、今年の新年会では前田栄三君が「雲南懇話会シンポジウム」の開催をお知らせする段取りとなりました。それで言い出した人間の責任として本稿をお届けする次第です。

私の提案は、過去数年来の小林尚礼君の梅里雪山活動に触発されたものです。多くの会員がご存知の通り、小林君は毎年のように現地に入り、氷河上に表出してくる梅里遭難者の遺体や遺品の収容活動を続けてくれています。いまや未確認の隊員は一人のみとのこ

とです。

彼の地道で敬虔な収容活動と、彼が村に住み込んで人々と交じり合つ姿に、村の人々は徐々に心を開いてくれるようになりました。彼の方も村での生活者としての日常を通じて、また、周辺の景観や人々の往来の有様を写真家として見つめるなかで、梅里雪山とその周辺地域の人々が作り上げていく世界についての理解を深めて行つたようです。私はこの何年かの間に彼がもたらしてくれた多くの写真から、また彼の語りから、彼が得たものと彼が描こうとしているものに強い共感を覚えるようになって来ました。それが、昨年の新年会での突然のような、しかし気持ちとしては必然のご提案でした。

私の提案は、「小林君の梅里地域での活動で創り上げられつつあるものを核として、我々の、あるいはAACKの新しい活動の地平を拓こうではありませんか」と言うものです。実は、はじめは「小林君の活動を支援するキャンペーンを」程度の積りでしたが、彼が示しているものを繰り返し見ているうちに、そのような外部の立場の関わりでは所詮収まりのつくものではなく、やるなら参加する者自身が、自分自身の何らかの実際的行為をもって関与するようなものにして行こうと考えるようになりました。昨年の新年会の後、何人かの仲間が時々集まり、話し合っているうちに、「雲南懇話会」を立ち上げようということになった次第です。

AACKは山岳活動におけるパイオニアワークを第一に志向し、その具体的対象として

ヒマラヤの未踏峰を扱いました。しかし、時の経過とともにそのような志向は極めて特殊な形態においてでなくては実現不可能になりました。パイオニアワーク、私はそれを「未の領域」を「既の領域」に転換する人間活動と考えますが、それが山岳活動においては初登攀、初登頂において実現されるのは論を待ちません。しかし、山と人々と歴史とで構築されてきた多様な世界、例えば雲南・チベット地域を、多次的に観るとき、広大で深遠な、かつ魅力的な「未の領域」が広がっていることを小林君の成果は啓示してくれていると思います。そこにはAACK再活性の可能性があるような予感を持ちます。来る三月のシンポジウムでどのような話が飛び交い、具体的活動に向かつて構想と意志がどのように結晶していくかを体験できればと楽しみにしております。

### 雲南懇話会の概要

前田 栄三

昨年五月のAACK総会終了後の懇親会の冒頭、関東地区会員の動きとして、梅里雪山を中心とする地域の総合的な研究の進め方について検討している旨、申し上げました。丁度その日、五月三〇日付の日本経済新聞朝刊に、人間文化研究機構・機構長でタイ研究家石井米雄さんの「学際機構から新学問を」と

題する記事が掲載されていきました。石井さんは、一九六七年から九〇年まで京大教授の職にあり、東南アジア研究センターの設立に当たっては、その旗揚げから関わったそうです。記事の中に、「一つの地域を歴史、文化、政治、経済など様々な面から総合的に研究する新しい学問……」という活字が躍っていました。

七月以降、関東地区に住む京大山岳部OBの青壮年そして中高年の有志が折々に集まり、中国雲南省及び隣接するチベット自治区を中心とした地域を総合的に研究しよう……ということ様々に意見交換を重ねた結果、この度「雲南懇話会」(英文名 Yunan Forum)という名の世間との情報交換・交流の場を持つ運びとなりました。当然の事ながら社会に開かれた集いでありますので、広く特に青壮年層の参加を得て活発な活動の推進を促していきたいと思っています。

この会は、AACKの長年に亘る「梅里雪山を中心とした地域」に密着した活動、とりわけ小林尚礼会員の活動を踏まえ、同地域に興味・関心を持つ人々が集まり、互いに知的好奇心を刺激しあいながら情報を交換し相互の研鑽・研究に励もうとするものです。もとより自然科学、社会科学を問わず、様々な分野・様々な切り口で自由闊達な交流を進めたいと考えています。

この為、対象とする(若しくは対象となる)地域は、雲南省とチベット自治区(梅里雪山の東西の地域)を中心としてその周辺地域、ラオス、カンボジア、ベトナム、タイ、ミャンマー、ブータン、インド、パキスタン、四

川省、青海省、新疆ウイグル自治区、モンゴル等などに及びます。地形、地質、気象、森林生態、動植物、あるいは数ある少数民族の歴史と文化を辿ろうとするだけでも、このような地域を視野に入れる必要に迫られます。本懇話会の発起人は、ほぼ全員がAACK(関東会)会員なので、「AACK関東会後援」として世の中に発信したいと思っています。

本活動の結果としてAACK事業の一層の活性化の一助となれば幸いです。なお、関東会という呼称は、西堀栄三郎さんの命名と伺っています。定款にいう理事会の議決を踏まえているかどうか念の為に確認し、必要があれば適切な措置を講じたいと思います。

懇話会は、原則として年に一回、現地のField workを年に一〜二回程度、催したいと考えていますが、縛りはありません。元氣な若手が推進役を担うようであれば、開催頻度も増えることが期待されます。当面、この三月二六日(土)の午後、東京・神田の学士会館で第一回の「雲南懇話会」を開催しようとする準備を進めているところです。懇話会の実施要領は、概要以下のとおりです。皆様の、そしてお仲間お誘い合せてのご参加をお待ちしています。

「雲南懇話会(第一回)開催のご案内

山・探検・麓の暮し/夢・好奇心

一. 日時 二〇〇五年三月二六日(土)

三時三〇分〜一九時三〇分

二. 場所 東京・神田、学士会館、地下鉄

「半蔵門線」「都営三田線」「都営新宿線」

神保町駅下車。

三. 懇話会参加費用 学生・院生、千円。一般、二千元。AACKと笹ヶ峰会員 今回 五千円。

四. 第一回「懇話会」の内容

「開会の挨拶」 松浦祥次郎

「雲南への道(青海省から雲南へ)」 田中昌二郎

「聖山の麓の暮し」 小林尚礼

「雲南の山の植物」 並河 治

「山を考える 今、考えること」 本多勝一

「ラオスの林業事情、山岳民族等」

「雲南の学術調査 地学的視点から」

「総合的懇談・意見交換」と「茶話会」

「安仁屋政武

「総括的懇談・意見交換」と「茶話会」

「安仁屋政武

「茶話会」

「安仁屋政武

実、小林尚礼

(AACKと笹ヶ峰会内外から若干名を幹事に加えます。)

発起人

松浦祥次郎、沖津文雄、谷口朗、野村高史、伊藤寿男、安仁屋政武、泉谷洋光、前田栄三、渡辺良男、出雲路敬明、芝田正樹、吉越 巨、甲斐邦男、山岸久雄、岩脇康一、幸島司郎、佐治与志也、宮坂実、東 卓夫。

## 雲南・チベット地域の学術調査

安仁屋政武

雲南という文字は日本人にとってなにか感性に訴えるものがあるのではないだろうか。雲の南というのは、あの雲(空)の向こうということ、山や自然に興味ある人にはもちろん、そうでない人にもロマンを駆り立てる名前だと思う。

私が始めて雲南を知り興味をもったのは、著者の名前を思い出せないが「日本人のルーツは雲南だ」という説に学生時代に触れた時である。一九八九年、学術隊員として梅里雪山に行く途中で見た水田稲作の農村風景は、まさに日本の昭和三〇年代(あるいはそれ以前)を彷彿させ、私には非常に懐かしかった。そして、「日本人のルーツは雲南だ」という

説を唱えたことがなんとなく理解できた。また、登山のベースとなった斯農村や調査した明永村では顔つきも日本の友人にそっくりなのが多く、本当に驚いたものである。しかし、道中で時折見かけた少数民族の女性のあざやかな民族衣装が、日本とは違うことを物語っていた。

雲南・チベットを対象とした学術研究は、当然分野にもよるだろうが、概して多くはないと推測する。私が関係する地学分野では、チベット関係の地質や氷河、気象などの研究はあるが(もちろん多くはない)、雲南地域の研究は寡聞にして多くを知らない。私は地学分野でも特に地形とか氷河に興味があるが、この分野では雲南は白紙に近いのではないかと思う。一九八九年、昆明から徳欽へ行くバスでは、日本とは全く違うスケールの地形、あるいは日本では見られない地形を窓からあつという間ではあつたが見た。当時、この地域は未解放で細かい地図等はわれわれの手元には無く、町と町の間はどこを通っているかも全く分からず、川や湖で場所の見当をつけるのが精いっぱいであった。しかし、興味深い地形を見た記憶は一五年経つても鮮明で、チャンスがあつたら調査したいという思いは今でも変わらない。

梅里雪山の麓の村、斯農が登山のBH(ベース・ハウス)であつたが、私は一人で隣村の明永とその周辺の地形調査に出かけた(あとで聞いた話だが、私の行動は逐一見張られていたようだ)。明永の谷では、集落の上流約二km付近まで氷河(この氷河のチベット名

は、当時現地書いてもらった漢字で、奶諾戈汝氷河、ローマ字で<sup>1</sup>La Lo Go Ru Di Heであつたが、その後のAACKの報告書ではナインゴル氷河と記されている。どちらが正しいのだろうか。あるいは、今では明永氷河と言っているのかもしれない)が流れ降りてきており、この氷河から流出する川に沿って氷河地形(モレイン等)や集落がのっている河岸段丘地形が発達している。また、周囲の斜面では山崩れが多かつたのも印象に残っている。川は集落の下流で深いゴルジュとなつて瀾滄江(メコン川の上流)へ合流しているの

で、下流は調査不可能であつた。この時の調査を基に、登攀隊長であつた横山宏太郎さんと共同研究を行い、この地域の氷河の発達と山地の隆起に関する論文をイギリスの雑誌に発表した。この地域の地形はとても面白いが、体力勝負の調査は大変であつた。

大理から徳欽へ行く地域もユーラシアプレートにインドプレートが衝突して形成された場所の東縁なので地学的にも大きな魅力があり、学術的にも重要であるが、全くの手つかずの状態である。他の自然科学分野はもちろん、人文社会科学分野でも同じように魅力に満ちた地域だと思う。このような地域で学術登山活動を行なえば、未踏峰の山に登るという登山家にとって最高の喜びに加え、学術的にも世界で始めてという調査が可能なので、知的好奇心もおおいに満足させられるのではないだろうか。

このように学術登山に対して無限とも言える可能性を秘めている地域とその周辺を対象

とした「雲南懇話会」が今度、発足することになった。皆さんの絶大なる支援と協力で発展させて行きユニークな会にしたいものである。

## 大日岳の「雪庇」調査計画発表される

大日岳遭難事件の山本・高村両君を支援する会（代表幹事 齋藤惇生会員）では、大日岳事件研究会を企画し（ニュースレターNO.三三に既報）、これまで事件の法的側面について研究会を重ね、検討を深めてきたが、このたび、次の目標としている「事故が発生したメカニズムの考察」を実現すべく、「大日岳の「雪庇」調査計画」を発表した。この調査は、雪氷学の分野にとつて画期的なものであるばかりでなく、われわれが通常見ることが出来ない「雪庇の内部」を、また「大日岳の巨大雪庇の実像」を見ることが出来る得難い機会でありますので、ここに紹介いたします。

（編集・田中昌二郎）

## 大日岳の「雪庇」調査計画

大日岳遭難事件の山本一夫・高村真司両君を支援する会

代表幹事 齋藤惇生

趣 旨 二〇〇〇年三月五日、大日岳山頂付近で雪庇崩落事故が発生し、文部省登山研修所主催の冬山リーダー講習会に参加していた二人の研修生が亡くなったということは記憶に新しいと思えます。この事件の山本一夫・高村真司両君を支援する会（以下、支援する会と呼ぶ）では大日岳の「雪庇」調査を計画しています。

大日岳山頂付近には巨大な「雪庇」が発達します。あまりに巨大であるため、登山者の常識の中にある「雪庇」をはるかに超えた形状を呈しています。多雪地の山稜には雪庇ではなく、「吹き溜まり」ができるということも広く知られた事実です。大日岳の山頂に見られるのは常識的な「吹き溜まり」でもありません。巨大な雪のドームです。

今回の計画はこの巨大な雪のドームを掘り出して、積雪地形の形成、崩壊過程を明らかにしようとするものです。具体的には大日岳山頂の北東方向、大日山谷に向かって迫出したドームに幅約二メートルのトレンチを掘り積雪断面を観察、計測します。深さ一〇メートル近く、長さは少なくとも二〇メートルに及ぶトレンチになります。チェンソー、雪堀

スコップ、手押しすりなどを使って二〇〇人以上の作業量に達することが予想されます（トレンチのイメージは付図参照）。

調査は大日小屋を基地として行います。例年、この時期に大日小屋は営業していません。今回、小屋主杉田賢司さんに特別のご配慮をいただき、利用することができるようになりました。入下山ルートの確保、食事の準備、小屋の管理、トレンチ掘りなどロジスチックスは山本一夫が率いる国際山岳ガイドチームが引き受けます。この調査の目的は積雪地形の観察ですが、同時にスケールの大きな積雪期登山を楽しむことができます。

トレンチ掘りに加わり雪氷学の発展に貢献しようという方、積雪断面を観察しようという方、冬山の遭難事故をなくそうと願う方々がこの計画にご参加くださることを心から歓迎いたします。ただし参加者は大日岳事件に深い関心を寄せ、山本・高村両君を支援する方で、積雪期のテント泊山行の経験があり、必要な個人装備（注一）が準備できる方、山岳保険に加入している方に限ります。できるだけパーティを組んで、ご参加くださるようお願いいたします。

調査日程 調査は二〇〇五年四月一七日から二七日までの間に行います。立山アルペンルートは四月一七日に開通する予定です。

現地基地と連絡事務所の設置 現地基地を大日小屋に、連絡事務所を立山駅前千山荘に設置します。入下山するときは必ず連

絡事務所を通じて現地基地とコンタクトしていただきます。

入下山日程 第一陣は四月一七日に入山し、現地基地を大日小屋に開設します。入山のルートは下のルートです。四月二十七日に基地を撤収し、下のルート またはにより下山します。

入下山ルート 室堂から室堂乗越、奥大日岳經由大日小屋

立山駅からケーブルカー、バスを乗り継ぎ室堂に入り、大日岳に向かうルートです。奥大日岳を越えるところはアイゼン、ピッケルが必要ですが、フィックスワークをしてルートを確保するので、難しくはないはず。室堂から約六時間。入山ルートとして最短です。

人津谷を経て早乙女岳經由、大日岳越えで大日小屋へ立山駅から人津谷出合までは歩き、人津谷を遡ります。文登研前進基地で尾根に取り付き前大日岳、早乙女岳を経て大日岳を越え大日小屋へ。ルートに難しいところはありませんが、長いルートです。前進基地または大日岳へ続く尾根で一泊する必要があります。

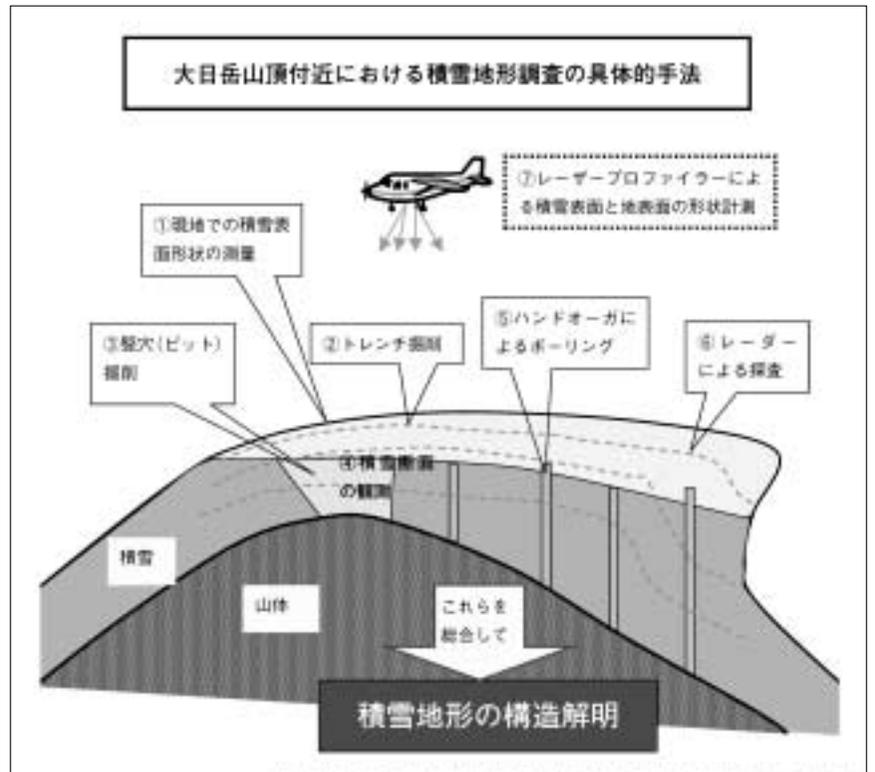
称名、牛の首、大日平經由大日小屋へ立山駅から称名まで歩き、称名から牛の首までは急攀です。大日平を縦断して大日平小屋へ。大日平小屋から大日小屋への大きな沢をつめます。難しいところはありませんが長いルートです。大日平小屋付近で一泊する必要があります。大日平スキーの場合、はスケールの大き

な大滑降が楽しめる下山ルートとして推奨できます。

短期参加 第一陣が大日小屋に基地を開設すれば、隋時、入下山することができます。二七日までならば何泊でも可能です。入山は原則として自己責任ですが、ガイドのアテンドを必要とする方には山本一夫が責任をもって人選し、紹介します。トレント掘り作業の進捗状況を考えると、四月二二日(金) 二四日(日)に入山するとほとんど完成した積雪層断面が観察できます。

調査体制 調査は支援する会が組織する大日岳積雪地形研究会(以下、研究会と呼ぶ)が実施します。この計画に参加していただく方は、研究会の指示に従っていただきます。

・総責任者 齋藤惇生(新河端病院名誉院長、元日本山岳会長)



横山宏太郎「積雪地形を考える」第四回大日岳事件研究会レジュメより

・総務 岩坪五郎(京都大学名誉教授) 連絡事務所担当  
・荻野和彦(滋賀県立大学教授) 現地基地担当  
・杉山イタル(杉山医院院長)  
・田中昌二郎(京都大学学士山岳会理事) 研究指揮  
・横山宏太郎(中央農業総合北陸研究センター気象資源研究室長)

## 研究総括

川田邦夫（富山大極東地域研究センター教授）、積雪物理、大型雪庇の形成機構

飯田 肇（立山カルデラ砂防博学芸課長）、気象と積雪構造、積雪地形の分布

・行動指揮 山本一夫（日本山岳ガイド協会認定国際ガイド）

作業に伴う危険 この調査は積雪期登山と同程度の危険を伴うことを予めご承知おきください。

費用 三食賄い付小屋利用料として全期間参加するばあい三〇、〇〇〇円、短期

参加のときは一泊六、〇〇〇円を負担してください。大日小屋以外の宿泊費、交通費は別途ご負担ください。

参加申込 二〇〇五年三月末日までに

・田中昌二郎 〒602-0806 京都市上

京区上立売通寺町西入敷之下町421-4

e-mail : trk0241@mbx.kyoto-inet.or.jp

・杉山イタル 〒603-8221 京都市北

区紫野上築山町43-3

e-mail : urati@y4.sor-net.ne.jp 宛に

お願いします。

ご連絡いただいた方に詳しく打合せ、協議をさせていただきます。

協議の結果によってはご参加いただけない場合があることを予めお含みおき下さい。

（注一）必要な個人装備は、わかん、スノー

シュー、山スキー用具（シール、クート

を含む）のいずれか、重山靴または兼用靴、アイゼン、ピッケル、ハーネス、ピーコン、スコップ、ソングレ棒、コンパス、地形図

（二〇万図 富山、高山 二・五万図 剣岳、立山、大岩、小見）、GPS等積雪期登山用具一式、カメラ、ツェルト、

ヘッドランプ、ローソク、マット、食器、スポン、テルモス、水筒、シュラフ、シュラフカバー、テントシューズ等テント泊用具一式、羽毛服、雨具、手袋、靴下、帽子、その他の冬山用の衣類、非常食、嗜好品等

のことで、それぞれの使用法については熟知していることが必要です。は必須ではありません。

## 五月連休にヒュッテからワンデイで楽しめる山スキーコース（その二）

高尾 文雄

四、天狗原山、金山

スキー技術 上級、体力レベル 中・上、標高差二二〇〇m、標準時間 登り五、六時間、下り五時間

ヒュッテから除雪された林道を黒沢橋まで

行く。出来れば車で橋まで行けば時間短縮になる。通常は橋の対岸に駐車スペースがある。雪からスキーをつけて杉野沢橋まで滑る。雪

の少ない年は林道を歩かされる。

杉野沢橋からは真川を右岸に沿って遡る。広い河原だが、滝沢との出会い手前で一箇所狭くなっている高巻きさせられる（夏道の残置ロープあり）。

滝沢出合から夏道通りに急斜面をジグザグに登って上の台地へ行く。スキーは担ぐ。標高差約八〇m。台地からはシールをつけて一七〇mピークを目指して沢状になった所を登る。途中から急で狭くなるので、適当に右岸の尾根に上がる。しかし尾根も最後はスキーを担がないと登れなくなる。

一七〇mピークからは尾根が広く、傾斜も緩くなるのでシールで快適に登れる。このあたりからタンネ帯となる。右に今回滑る金山からの尾根を見ながら高度を稼げる。標高二〇〇〇mのゴルからは天狗原山への最後の急斜面となる。尾根上は雪が途切れていてブッシュが出ていますので、スキーを担いだほうが結局は楽に登れる。シールで登る場合は頂上からの急斜面を登るが滑落に注意する。

左の尾根から回り込みながら天狗原山に着。頂上は緩やかで広い。金山までの縦走では一度気持ちの良い斜面を滑る。広い適度な傾斜の斜面で、ここは出来ればシールを外して滑りを楽しみたいところ。シールを再びつけて緩やかな斜面を金山へ登る。金山はどこが頂上かわかりにくいくらい広くて緩やか。ガスの場合は十分注意する。頂上はかなり奥にある。

下りは頂上からシールを外して滑り出す。



金山谷に入つて標高一四七〇mまで滑り、滑降は一旦ここで終了。ここからシールをつけて一七〇一mに突き上げている小さな沢を南へ詰め上がる。この沢の入り口の発見には注意。これより下流まで金山谷を滑り降りるとゴルジュとなり沢が割れている。

登り返しの沢は出合からすぐに左へ分かれる。左を取り進んでいくと次第に急になる。適当に左岸の斜面に上がり回りこむ。一七〇一mピークまでシール

で登れる。

一七〇一mから再び滑降開始である。登ってきたルートではなく、左の斜面から滑り降りる。木が多い急斜面なので注意。途中から沢に入り、最後は台地に出て登りに使った夏道を探す。

スキーを担いで夏道を真川の河原まで下る。この斜面にカタクリが群生しているので運がよければ可憐な花が見られる。

河原に着いてからもしばらくスキーを担いで、行きに通つた真川の高巻を越したところでスキーを着けるほうが良い。河原を杉野沢橋までスキーを滑らせて行く。橋からは雪が

あれば林道をシールは使わずにスキーを滑らせながら黒沢橋まで帰ることが出来る。滑り疲れたところに黒沢橋に着く。

#### 五、焼山

スキー技術 上級、体力レベル 上、標高 差一三五〇m、標準時間 登り六〜七時間、下り五〜六時間

ヒュッテから真川と滝沢との出合いを上がつた台地までは天狗原山、金山の頂に同じ。台地からほぼ夏道通りに真川の右岸斜面の緩やかなところを狙ってトラバースする。

台地からシールをつけて右方向へトラバース気味に登る。眼前の尾根を少し登ってから右へ回りこみ、トラバースに移る。急斜面でその下は真川のゴルジュなので滑落は許されず緊張するところ。

トラバースは金山谷が近づくと楽になる。最後は金山谷へ向かつて斜滑降で滑り降りられる。真川本流はここからすこいゴルジュとなるので、金山谷を横切つて対面の尾根に上がる。尾根の末端は雪が付いていなく細いので夏道と同じく真川の出合から少し金山谷を登つた所から尾根に取り付く。

尾根の一四五四mピークから上は一転して広い斜面となっている。一四五四mピークあたりから真川へ向かつて斜滑降で滑り降りる。このあたりはゴルジュが終わわり河原となっている。ここから真川は穏やかになり、シールで右岸を自在に登ることが出来る。ルートが複雑なのはここで終わる。

緩やかな斜面を天狗原山とのコルまで滑って東へ派生する尾根を見つめる。別れる付近は広い平原で方向を見失いやすいので注意。尾根に入りタンネを越えると、すぐに木がまったくない広い急斜面となっている。素晴らしい斜面で一気に二〇〇m滑ってしまう。一五八mピークからは尾根ではなく斜面状になっている。ここも東の方向へ滑り降りるが、木がなくて適度な広大な斜面で山スキーの醍醐味が味わえるところだ。最後は右へ向かい金山谷に滑り込む。注意しないと低い尾根の北側にある裏金山谷へ滑り降りるので注意する。

裏金山谷、地獄谷を過ぎると二俣に分かれる。左俣を取り富士見峠方向を目指す。シールでジグザグを切りながら快調に高度が稼げる。振り返ると乙妻、高妻が正面に見える。富士見峠から一〇〇m上の焼山の肩に着く。肩からは急斜面となりシール登るのは苦しくなる。

最後は岩がガラガラの斜面となりスキーは担ぐ。頂上はドーム状となっているので、左から北側へ回り込む。岩と石の急斜面でとても歩きにくい夏道をしばらく行くと頂上に達する。焼山は南北とも日本離れした他に比類の無い素晴らしい斜面が続いている。滑りは登りと反対側の東斜面を胴抜キレット

トへ向かう。頂上直下の雪田からエントリールできる。出だしからすぐに一段落ち込んでおり、キレットまで見通せず緊張する。ゆっくりと滑り出すと、急斜面の手前で大岩が出てくるが左右どちらからでも行ける。その大岩からはキレットまで無木立の広い急斜面が続く。目の前は火打山。広すぎでどこを滑るか迷うほどだ。大きなターンでスピードを上げて滑る。時々雪面が割れて段差になっているので注意する。

キレットからは南へ方向を変え、U字状となった沢を滑る。ここも木が全くなく自由自在に滑れる。スピード、ターンの大きさも思いのままである。かなり滑り疲れるので休みを適度に取るようにする。



裏金山谷  
近くなると  
傾斜も緩やかに  
なり快  
適な滑降も  
終わる。金山  
山谷手前で  
往路と同じ  
ルートで高  
巻を開始す  
る。シール  
を付け台地  
まで斜登行  
で上がり、  
復路はこの

緩やかな台地を六〇mほど登り、金山谷のト  
ルジユを越えたあたりから金山谷へ降りる。  
降りたところから対面の一七〇一mピークへ  
上がっている沢を登る。これは天狗原山、金  
山のツアーで復路に金山谷から登る沢と同  
じ。

一七〇一mピークからは天狗原山、金山の  
項に同じ。  
以上

## 図書紹介『山の世界』

酒井 敏明

昨年夏、梅棹忠夫・山本紀夫両氏編集の表  
題の本が岩波書店から出版された。良い本で  
あり、私達の仲間が大勢執筆陣に名を連ねて  
いる。写真・図版もわりに多く、総三四〇ペ  
ーシ余、定価三〇〇円+税。まだご存知で  
ない人がいるかも知れない。いささか遅きに  
失するが、紹介します。敬称は省略させてい  
ただく(文中\*は会員を示す)。

お堅い出版社だがオビに「三〇余名の山の  
研究者と登山家が力を結集、日本初の本格的  
な山の総合書」の惹句がある。AACK会員  
は編者二人のほかに七人、それぞれ得意の分  
野を担当している。

\*梅棹はまえがきでいう。現在、日本の登  
山人口は増えているが中高年者が多く、若者  
の自然ばなれがおきているのではないか、野

外科学の後継者育成にも問題である。なにが若者の山ばなれをおこすのか、そもそも山とはどのようなところなのか、山に生きる人々の暮らしや文化はどのような特徴をもつかを明らかにするために、この本はつくられたとのべている。

\* 山本は序章いま山で何がおきているのか(二一ページ)で、現在日本で活躍している野外科学者の多くは山岳部育ちであるが、この点前途はくらい。天山からチベットをへてネパールにいたるアジアの高地、エチオピアを中心とするアフリカの高地、それにアンデスを加えた地球上の三大高地には相当の人口(付表では三億人弱)が居住するが、いずれも先住民で貧困化がすすんでいると指摘する。こうした山の世界の理解をはかることを本書は目指している。

1章なぜいま山か(六七ページ)には、両編者の対談「山に学んだこと」、\*齋藤藤生「中高年登山の現況と行方」を含み六編がある。エコ・ツーリズムにふれた小野有五「我ら皆、山の民」と江本嘉伸「エベレスト登頂から五十年」をおもしろく読んだ。

2章山の環境(九〇ページ)では、自然地理、気象、雪氷、生態など九人の研究者が山の自然の特性を平易に説明しようと努める。本会会員からも\*安成哲三「チベット・ヒマラヤが決める地球の気候」、\*中尾正義「水資源としての山」、\*幸島司郎「氷河と昆虫」などが写真やわかりやすい解説図を付した試論を寄せているのは心強い。八五ページと九五ページにのる二枚の写真は槍ヶ岳から中岳に

いたる同一被写域を含んでいるが、撮影した季節が相違するため槍沢源流部や大喰岳南東面の残雪量が増減することを示していて、興味を覚えた。二人の筆者間または編者にその意図があつてのことかどうかは知らない。

3章山の暮らしと文化(九一ページ)は、

\*松林公蔵「なぜ人は高地に暮らすか」と

\*山本紀夫「山岳文明を生んだアンデス農業とそのジレンマ」を含め、高地民族の農牧業と交易活動、日本の豊山信仰などの伝統文化や、シエルパ族のガイド稼ぎなど、九編を並べ、重田眞義はエチオピア高原の高地のエンセーテイもと低地のコーヒー青葉の交易を事例として両世界の対立が確認されるとのべ、白坂蕃は毎年六月と九月に羊群を国境越えて移動させる南チロルのいまや希少となった村の生活を報告する。日本の山間地域の集落が徳川政権の山村つぶしで秘境と化したこと、戦後のエネルギー革命の結果過疎化した山間の社会的空白地域が広がりがつつあることを論じた藤田佳久「山間地域の集落と過疎問題」は重い内容を含んでいる。

4章山の危機と保護(六〇ページ)は山岳観光の進展と地球環境の温暖化などをあつかう六編からなる。渡辺悌二はヒマラヤの観光開発があまりに急激にすすむと固有の文化・伝統の保存が困難になることを、岩田修二はネパールやブータンで自然災害が多発しているこれは世界全体の問題として取り組むべきことを述べる。\*月原敏博はブータンが森林資源の保護を目指す姿勢を評価している。

付録山の本ガイド(一四ページ)は\*薬師

義美が担当、私など気付かないでいる良書を丹念に拾い上げてあり、たいへん有益である。二〇〇二年の国際山岳年のために雑誌『科学』十二月号は特集記事「山の世界」を載せた。これをもとに本書ができた\*山本はあとがきを書く。第一線の登山家、研究者が最新の成果を報告している書物として、座右に置いて損をすることはないことを保証する。

## 会員動向

## 編集後記

伊藤愿さんのお名前は、かなり以前のAACCK年次事業報告・事業計画書上で、たしか、「本会会員伊藤愿が持ち帰ったパウル・パウアー著『ウム・デン・カンチ』独語原著を全訳出版する」として、相当永い間拝見していたと思う。それは、あの国際登山探検文献センター文献目録『九四三ウム・デン・カンチ（パウエル原著）』だったのだろう。伊藤愿さん訳の「ヒマラヤに挑戦して」も手に入らず、読んだのは抄録英語版からの翻訳「カンチエンジレンカをめざして」（実業の日本社版）にとどまった。伊藤愿さんは我々にとって伝説の人であった。しかし今回、日本の登山黎明期に国内外で素晴らしい活躍をされていたこと、そうそうたる先達方とのエピソードを紹介していただいた事で、そのパイオニアとしての偉大さを知ることが出来た。文献を調べ、遠くまで訪問取材していただいた平井会員に心より感謝致します。次号「人物抄」が楽しみです。

関東から熱気が上っている。「雲南懇話会」の発会を、諸手を上げてお祝いしたい。前号の松林会員「雲南再訪」と同時多発的にこの計画が立ち上がったことに、意義を感じる。AACCKにはそうそうたる人材が溢れている。専門分野に展開した会員は、その分野で立派な業績を上げておられ、既に一家を成しておられる方も多い。ここにこの展開した力を集め、協力しあう事が出来れば、また、共

に楽しむことができれば素晴らしいことだ。如何せん高年齢化により、過去の事故により、また若手会員の不足により、登攀力は払底しているといっても過言でないだろうが、新しい形はきつと生れてくるだろう。

大日岳事件は関係者の真摯な努力により、山本、高村両氏は不起訴となったが、これは法律面のことである。「雪庇」「霜ざらめ」「巨大積雪ドーム」など明らかに変わったわけではなく、残された問題は多い。その解明の為に第一歩を踏み出そうと、第一線の雪氷学者、積雪地形学者、山岳プロガイドを動員した長期間且つ大規模な今回の「雪庇調査」に期待が高まる。しかも、その調査現場を、登山者にも公開しようという試みは、「雪崩」「積雪地形」「雪庇」の啓蒙、教育効果は計り知れないものがある。

春の大日岳頂上の巨大雪庇、積雪ドーム断面を、とくと観察しましょう。

前号に続き、「五月連休ヒュッテからワンデイで楽しめる山スキーコース(その二)」を掲載します。金山・天狗原山、焼山は、ヒュッテの窓から眺めて、今年は行くぞ、行くぞと思いつながら果たせないうえです。『桑原武夫紀行文集三巻』の「なつかしさ」には、「仲間と乙妻・高妻の征服をめざして、笹ヶ峯から黒姫山麓の、その昔林舎小舎に向かったのだった。晴れた日、巨きなブナの疎林をスキーで縫って行った楽しさは、今も私の精神のどこかに宿り、私の活力をなしているように思われる。」とあります。前号の三田原山、火打、乙妻山ガイドを参照し、春山スキ

ーとヒュッテを楽しみましょう。例年五月の連休前には笹ヶ峰ヒュッテの先、乙見湖ダムサイトまで完全に除雪されます。

山本紀夫会員から、書評欄に『山の世界』を紹介してはと提案いただき、その二、三日後に、JAC京都支部新年会でご本人にパツタリお会いするができました。全くの初対面でしたが山本さんと直ぐわかったのは、この本の著者写真があったお陰です。そしてその場で、突然でしたが同じテーブルにおられた酒井会員に書評をおねがいし、引き受けていただいた次第です。この本がAACKの進む道を取って先取りしているのかもしれない。

次号原稿締切日は五月一〇日、発行予定日は六月中旬を予定しております。奮ってご寄稿願います。

(田中昌二郎)



雲南の村



富士見平手前から乙妻山・高妻山を望む

編集委員

田中昌二郎

発行日

二〇〇五年三月末日

発行所

京都大学学士山岳会

〒六二〇〇二 宇治市五ヶ庄

京都大学防災研究所

吹田啓一郎 気付

製作

京都市北区小山西花池町一八

(株)土倉事務所